ご祭神

東相殿　罔象女命（みづはのめのみこと）　摂社岳神社祭神

油日大神（あぶらひのおおかみ）

西相殿　猿田彦命（さるたひこのみこと）　摂社白鬚神社祭神

油日詣で

滋賀県甲賀市甲賀町油日一，〇四二
油日神社々務所
電話・FAX　〇七四八－八八－二一〇六
郵便番号　五二〇－三四一三

ご神徳

油日大神のみ名は記紀にも見えず、又油日の名も国内に見当らない。たゞこの地に於いてのみ千数百年の昔から、油日大神とのみ申しあげて篤い信仰がさゝげられて来たのである。油日大神はアブラのヒの大神さまであって、万有始動の根元神として諸事繁栄発展の大本を司られる大神さまである。従って古来より諸願成就の神として衆庶の尊信あつく、又油の祖神として業界の崇敬があつめられている。

猿田彦命は道案内（サキダチヒコ）の神として方除授福のご神徳高く、又罔象女命は水神として衆庶の生業に大御恵を光被まします。

ご創立

南鈴鹿の層巒が南に尽きるあたり、神の御山の姿もおごそかに油日岳が聳えている。春朝翠霞の中に映ずる油日岳、旭光輝き亘る秋空にうき出る油日岳、四六時中仰ぎ見るこの御山のみ姿が人の心の糧となったことは今も昔の変りはない。油日大神は太古この油日岳を神体山として鎮まり給うたが、世を経て今のこの本社の地に移り鎮りましたのである。今も毎年九月十三日夜本社にて秋のヒのまつりが行われるが、その前々日十一日の夜には信心の人たちによって岳の頂上にて一夜を参籠し夜を徹してご神火を焚き上げる千年来の古い姿が残されている。

その後今を去る千百四拾有余年の昔、陽成天皇の御宇元慶元年（八七七）十二月三日油日神に神階を授けられたことが国史三代実録に見え、所謂国史見在の古社である。

朝野の崇敬と甲賀の総社

元慶以降御代々々神階は累進して弘和の頃正一位に昇り給い、明応の棟札を始め古書古器皆正一位油日大神と見えている。この神階奉授のこと、或は朝臣参向のこと共上朝廷の御崇敬の厚かったのを窮い得る。中世に入ると、或は明応の本殿再建、永禄の楼門建立となり、或は天正年間永代神領百石の寄進、元和奉献の鐘楼、石灯となるなど甲賀武士及地頭領主等の数々の尊信の跡を残している。然もこゝに特筆すべきは、郡下官民が当社を以て「江洲に無隠大社」と仰ぎ「甲賀の総社」としてその御神徳に敬いまつったことである。即ち明応年間本殿造営の御

奉加は実に近郷一円に亘り、油日谷、大原谷、佐治谷、岩室郷に於いて頭殿をはじめ多くの所役をつとめて当社大祭を奉仕し来たことは千年来の事実である。岩室の鎮守瀧樹神社、小佐治の明神佐治神社、石部の古社吉御子吉姫神社等の間に現に存している幾多の縁由、杣、横田、野洲、遠くは大戸の地域に及ぶ郡下全円その史実古伝に於いて或は神輿を頒ち、之を祭り、祭日を特定し、或は分霊と伝え、親子の縁を称し、その崇敬の跡を豊富に存している。

野洲川（天安河）の上流祝詞ヶ原の聖地からは、常に油日大神と天照大神が遥祭されていた。かくして現に崇敬者は郡下四万余戸に及んでいる。この深い広い崇敬は即ち社頭の隆盛となり、維新前はその神領に於ても野山除地村内にて五百四十余町歩、近郷にて千百三十余町歩の山手米を有し、境内亦十一町三反七畝歩を算した。現に楼門内社前の荘厳な結構は六町歩の神奈備と相俟って他にその例なく、よく「甲賀の総社」としての真面目を呈している。

油日の宮居しずもる　もや之中
大日輪は　あかあか昇る

正　浩

祭　禮

油日まつり　五月一日　春の例大祭である。円融天皇の天元元年（九七八）橘朝臣敏保卿が勅命を奉じて参向したのを、甲賀の五姓、上野、高野、相模、佐治、岩室の五氏が年々交替して代参したのに始まると伝えている。これを頭殿（とうどう）参向といゝ、維新前まで

は連年行われていたが、明治初年より氏子関係にて上野頭のみによって行われること、なり五年に一度となった。次は平成三十三年の五月一日。

往昔この油日まつりには四十数基の神輿が乗馬と共に延々長蛇の列をなし野洲の下流石部の川原にお旅したと伝えられているが、今は毎年二基の神輿にて往復十粁のお旅が行われている。五年に一度のまつりには、昭和三十三年県の無形民俗文化財に選択されている「奴振り」が行われる。郷土色豊かな長持奴の歌のしらべ、毛槍奴挾箱奴の優雅な踊り姿、往時の盛大さが偲ばれるのである。又このまつりには列結野お旅所にて蚊帳を張る珍らしい蚊帳まつりがあり、信者がその中に入って神酒み鏡餅をいたゞき厄除の恵を受けるのである。

元旦祭　一月一日

初詣　倖せの肩　ならべゆく　青雲子

厄除祭　二月節分

祈年祭　二月十八日　五穀をはじめよろずの生産増強商売繁昌を祈る。

岳ごもり　九月十一日　岳頂上にて徹夜ご神火を炊き上げつゝ参籠

大宮ごもり　九月十三日　秋まつりである。徹夜万灯を捧げ氏子信者は東、西廻廊のそれぞれ定まった座で蚊帳を張りご神徳をたゝえ、油のヒの恵に感謝する。

新嘗祭　十一月二十三日　この年の新穀を供え神の恵み自然の恩に感謝のまことをさゝげる。

諸願成就月次祭　毎月一日

油の月次祭　毎月十三日

油の祖神と蚊帳まつり

油の祖神としての神事は変ることなく、今も九月十一日の油日岳頂上の油まつり、翌々十三日の本社に於ける油まつり、この二つの秋まつりとして厳修されている。岳頂上に輝きはじめた一点の灯火は次第々々に其の光明を増し、大自然の光はこゝを根元として天地を覆い、日の恵み火の慈しみに森羅万象にわかに生成化有した無極

の神威は、今も夜を徹して焚き上げられる九月十一日夜の岳頂上の一大神火となり、その光り皎々として数里の外を照らし、之を拝み得らるゝ限り甲賀、伊賀両国を始め遠近の人等は、油日大神の荒御魂の顕現として家々里々で之を遥拝している。そして翌々十三日の夕刻からは本社に幾百の信者が参集、東西の廻廊に幕を張り蚊帳を吊り、その中に参籠して社前には万灯の灯火を奉り、之亦夜を徹して油の祖神に熱禱をさゝげているのである。古い時代から油業者、又行商人等も多数参籠されたようであり、今は東京、東海、京阪神、滋賀等全国油業界の参拝も年々賑わしくなっている。

上述万灯まつりの廻廊の蚊帳つりをはじめ、五月一日神幸祭御旅所での蚊帳まつり、厄除の信仰のみでなく、蚊帳が古代繊維の代表であることから繊維業者の信仰もあつい。

重文建造物　附棟札

境内結構十数棟の社殿のうち、本殿拝殿楼門及び東西廻廊の五棟が、之らに係る十八枚の棟札と共に国の重要文化財に指定されている。（本殿一棟、附棟札十五枚及び楼門・廻廊三棟・附棟札三枚昭和二十五年指定、拝殿一棟昭和三十三年指定）拝殿以外の四棟は織田信長入洛以前足利末期のものであるが、近在の多くの建造物が殆ど戦国の兵火にて消失しているに拘らず信長入洛直前のま新しい建物が揃って温存されていることは珍らしいことである。これは半歳ばかりの短かい期間であったが、奈良一乗院の門跡から脱出した覚慶後の十五代義昭将軍が、神社の南二粁に居を構えた甲賀武士和田惟政の邸にあって信長と連携を保っていたためであろうと思われる。当時甲賀武士は油日神社を甲賀の総社自分等の祖神と仰ぎ、覚慶公方も亦永禄八年（一五六五）のある一日油日社に詣でている。

本殿は明応二年（一四九三）上棟、三間社流造　向拝一間、桧皮葺　向拝と身舎正面の蟇股、及び舞楽を演ずる楽人の姿が浮彫にされた両妻の脇障子が珍らしい。棟梁は藤原宗弘（甲良氏）

棟札　明応、永禄、寛永、寛文、元禄、正徳、享保、寛保、天明、文政、安政、慶応の銘　十五枚

楼門は永禄九年（一五六六）の建立、三間一戸楼門、入母屋造、桧皮葺、棟梁大工は甲良五良左衛門尉、上層中の間の蓮花飾り、下層の葉ばかりでできた蟇股など名高い。

棟札　元禄、宝永、天保の銘　三枚

東廻廊は桁行九間西廻廊は桁行十間、共に梁間一間　一重切妻造桧皮葺　楼門と同時代の建立。

拝殿の建立は天正年代、桁行三間梁間三間一重入母屋造、妻入、桧皮葺、正面及背面に軒唐破風附なのが特徴。広々とよく繁った林相を背景に、上述重文建造物が、南の正面から楼門、その東西に廻廊、その奥に拝殿、中門の奥に本殿と凡そ一直線に並んだ社殿群、白砂の庭も十分のゆとりをもって整然とまとまった一郭が美しい調和を奏でていることも全国的に珍らしいとされている。

宝物と無形文化財

福太夫神の面とずゞい子、昭和四十七年県指定有形文化財、面内側に永正五年（一五〇八）櫻宮聖出雲作の墨書、ずゞい子背面に出雲明秀の銘、往昔正月初申の夜拝殿にて行われた豊作祈願の稲講会の神具

聖徳太子絵伝　四幅　絹本着色　市指定文化財
三千佛　三幅　市指定文化財
十二天画像　二幅　巨勢行忠筆
大般若経　六百巻　箱書に貞治二年（一三六三）
槍　二筋　貞享六年（一六八九）梅田木工之丞治忠奉納
神道流（本心鏡智流）

太鼓踊（大踊り、小踊り）昭和四十八年国選択無形文化財

往昔水不足に悩まされた里人等の必死の雨乞をしたのが大踊り、かなえられると踊りまくっての返礼、これが小踊りである。現在は氏子内四ヶ字にその伝統をつながれ、随時に奉納・公演されている。

境内社及祖霊殿と岳、白鬚両摂社

明治四十四年村民敬神の赤誠はこって一となり、村内各字の村社三社、無格社七社を本社に合祀合霊して一村一社の美を成し、八幡常松二神社にその祭祀を厳修している。今本社の氏子は甲賀町内九地区凡そ一千戸、その氏子の祖先の霊は奥深い境内の祖霊殿に鎮ります。

白鬚神社は本社の西方矛杉高き丘陵に鎮座、その本殿は明応を下る十数年後永正七年（一五一〇）再興の棟札を存し、古書、又本社と同時代の創立と伝えている。祭神猿田彦命は本社にも配祀されているが、油日大神の天降り鎮座ましし折のサキダチ彦で、授福方除敷地祓いの神として賽者の数も多い。

岳神社は杣の水源油日岳頂上に鎮座　油日大神の神体山として荒御魂をまつり、水神罔象女命を配祀、社殿は四十年目毎に式年の造営が行われる。このお山は海抜六九〇余米、頂上に聳える老桧巨杉も鉄道沿線から肉眼で見える位の手近な山で、一日のハイキングコースとしても恰好なところと喜ばれ、頂上からは甲賀、伊賀の山野が一望の中に在り、近江富士も可愛いゝ饅頭のように見え、晴天のときは琵琶湖の一線が青く浮き出される。

○奴の歌、長持歌（口伝）

一、奴が社にふりこんでまつりを祝うめでたさよ
　ハレワイサノセ　アリャアートセ

一、見たか聞いたか油日さんの頭殿御用のだて奴
　サツマの長持カラデモ百貫重ケリャホットケ、
　又来ル道中ヂャ　エッシエッシ

○小踊小じんやくの歌（万延本より）

七、おんもしろや柏のばん場へ出て見ればげかいの
　りう神天女のごとくひめよしひめ子があつまり
　て合拍子手拍子あはしたりやのふ

八、くるとまわりや　風車

○初祭神事の歌（年中行事より）

第十二ずゝいのよぶ

ずゝい子よ〳〵御足持てこひ、御足もてこんさきに小足ぶみに踏ふに、引是より掛合の言、ヲゝジョ、なんぞよ、火打形の辻でたうに殿に合候得ば、ずゝい子が母か先此方へ座ス、おゝせ事あり跡に付て参候得ば今ン年の今年でこりゃの、どりゃの、ヲゝジョ、なんぞよ田人は何千人御座る（中略）去年からのはりしゃうべん三社大神神しゃう〳〵〳〵〳〵

参 拝 道 順

○ＪＲ利用の方は草津線甲賀駅、又は油日駅下車凡そ徒歩30分、○新名神高速よりは甲南ＩＣより凡そ20分、○甲賀土山ＩＣより凡そ15分、○国道一号線東よりは土山町蟹ヶ坂にて左折県道南土山甲賀線及び神上野線を経て凡そ15分、○名阪国道よりは上柘植ＩＣを下りて北へ凡そ10分。

油日神社公式ホームページ
http://www.aburahijinjya